

瀬戸内寂聴

+

伊藤比呂美

先生、ちよつと

人生相談

いいですか？

## まえがき

伊藤比呂美いとうひろみさんは早くから詩人として世に知られた才人であった。女性の詩人のなか少ない日本の文壇で、若くして詩人の名を背負った比呂美さんの存在はユニークであった。文章もてきぱきして気味がよく、新聞や雑誌からの注文も多く、いつの間にか若いのに身の上相談で頼られるようになっていた。縁がなく私とはなかなか会えなかったが、この際、この本を作るため、はじめて逢って話すことになった。

寂庵の門をくぐったとたん、発した彼女の第一声は、

「あ、どうしよう。ブラジャー忘れちゃった！」

であった。迎えに出ていた出版社の人たちも、寂庵の従業員の娘たちも、比

呂美さんより仰天して、赤くなったり、青くなったりして、その場でうろたえていた。

ブラジャーの押さえのない豊かな乳房は、ブラウスをつき上げて、力のみなぎった乳房が、ブラウスを破りそうに張り切っていた。

その日、初対面の二人の対談がこの本になった。

私は比呂美さんの詩しか読んでおらず、身の上相談やエッセイはほとんど読んでいなかった。複雑なこれまでの男女関係もまったく知らなかった。ただ現在ではアメリカ人の絵描きさんと何度目かの結婚をして、アメリカに住み、九州のご両親の病気のお見舞いに、月の半分は九州に帰っているということくらいしか知らなかった。

ブラジャーを忘れたと気にする比呂美さんのために、私も法衣の下のブラジャーを外して素乳（そんな日本語があったかな？）で対面することにした。

はじめて逢ったと思えない親近感がたちまち二人をひきつけた。差し向かった相手の気持ちも三分も経たずに、素乳の二人は理解し合い、十年以上も昔か

らの友人のように、何でも話しあった。

私は以前から漢訳のお経がむずかしいので、日本語の美しい訳のお経が欲しい。それを一緒にやってくれる女性の詩人はいないかと思いつけていたので、比呂美さんに逢うなり、この人だつと、その相手に選んでしまった。

ところが比呂美さんは、もうとつくにそれをやっているという。ああ、それならいい。九十も半ばを超した私は、もういつ死んでも安心だ。比呂美さん訳の日本語の美しいお経をあつた世から聴けると思うと、心が豊かになっていた。

今、その時の対談を読み直してみると、男の話など、あからさまにしている、どうかと思うが、二人とも正直に、真剣に話しているので、これでいいと、直さなかつた。

比呂美さんはこの数年のうちに、九州のご両親もアメリカの御夫君もあの世に見送られた。ごく最近は、心酔していた九州の天才詩人、石牟礼道子いしむれみちこさまで急逝してしまった。どんなに寂しいだろうと、思いやるだけでも涙が出る。

この本が、そんな彼女を少しでも慰め、笑いを思い出し、おなかを空かせて

くれるといいのになあと思う。

彼女だけではない。同じ苦勞にじっと耐えて、けなげに生き続けているらしい女人たちの心に、ほっこりとしたゆとりをよみがえらせてくれると、いいのになあと心から願っている。

平成三十年八月

瀬戸内寂聴

まえがき 瀬戸内寂聴……………2

## 第一部 寂聴先生、「鬱」と「いじめ」経験を語る……………9

わたし、「ポスト寂聴」ねらってます／お経はほんとに詩みたいですよ——比呂美／病気で鬱の入り口に／シモの世話だけはされたくない／転んでもタダでは起きない寂聴さん／ガンは怖くない／地獄や極楽は「ない」／介護は愛情か、エゴか／いじめとバッシング／三十代で自殺未遂したわけ

## 第二部 女の悩み、娘の悩み、母の悩み……………31

子どもを捨てた話／最後は「家族」を書きたい／やっぱりヌードを撮ってもらえばよかった／更年期からのセックスを考える／五戒を破ったこと、絶対に守ったこと／アメリカで、できかけた話——比呂美／「三人で、したことはないわよ」／子どもよりも、男よりも、仕事。／別れた男への未練をとう断つか／毒母は切り捨ててしまうべき／ふたたび「子どもを置いて出ること」について／「フロイトの弟子」の心理療法／身の上相談、コツのコツ／心を病んでいたころ／すべての悩みの根本はコンプレックスである／暴力男とはさっさと別れなさい／出家の原因は女性ホルモン／「なんで奴隷を探さないの」／女の盛りは五十代／不倫は「落雷」

## 第三部 先生、死ぬってどういうことですか?……………71

今夜にでも、コロッと死にたい／美しいご遺体たち／最後は断食で美しく／気が付

#### 第四部

### 小説家という「生き物」……………101

いたらお医者の方が早死にしてた／「生まれさせてもらった命」に価値がある／  
犬やネコも仏様になれますか——比呂美／お墓の話／遺骨は食べたほうがいい／身  
近な人の死をどう受け止めるか／安楽死を考える／死ぬ時も耳だけは聞こえている  
／やはり死は「無ではない」？／死ぬときはひとりがいい／無になるってどんな気  
持ち？／「いつ死んでもいい」と思うわけ／ペットを棄てる、親を棄てる

小説家という「生き物」／作家の煩惱／才能を信じてくれた母／寂聴・比呂美—  
—対照的なふたり／「私には才能がある」と信じて／河野多恵子さんとの友情／三  
人揃えば悪口ばかり／ひとりだけ生き残るということ／大好き、鷗外さん／「詩の  
原稿料っていくらなの？」／入ったおカネが縁の切れ目／詩を高らかに歌わないと  
革命は起こらない／若い同業者たち／やっぱり、みんなライバル／ワールドワイドに  
活躍中の孫たち／私も「狂うひと」だった——比呂美／孫やひ孫の話を書きたい／  
体育会系作家のふたり／好きな男と嫌いな男／やっぱり後悔はしない

比呂美が読む、おすすめ瀬戸内晴美・寂聴文学……………136

あとがき 伊藤比呂美……………149

解説——みずみずしい二人 瀬尾まなほ……………154

装丁・デザイン 大森裕二

構成 田中有

写真真提供 齋藤ユージ 吉原洋一

第一部

寂聴先生、「鬱」と「いじめ」経験を語る

伊藤比呂美（以下、比呂美）

## あたし、「ポスト寂聴」ねらってます

先生、今日はよろしくお願いします。あたしも、先生ほどじゃないんですけど、人生相談を新聞で二十年くらい続けていまして。ライブ版の相談もあっちこっちでしているんです。

瀬戸内寂聴（以下、寂聴） 知っていますよ。あなたただ若いから、いろいろ動けるのね。私はさすがに人前で回答することは少なくなっただけど、まだ相談はよく届くわね。

比呂美 仏教の教えで、四苦八苦ってあるじゃないですか。

寂聴 はいはい。愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦ね。

比呂美 そうそう、それです。あたしのところに来る相談をよくよく考えつめてみると、だいたいこの四つに分けられるんですよ。

寂聴 生きる、病む、老いる、死ぬ、の苦しみが四苦で、それに今、あなたが言った四つの苦を足して八苦。四苦八苦というのはそこから来ているのよね。

比呂美 愛する者と別れる苦しみ（愛別離苦）。さらいな者に会っちゃう苦しみ（怨憎会苦）。ほしいものが手に入らない苦しみ（求不得苦）。それから見聞きし触れて味わう、いろんなものに

執着する苦しみ（五蘊盛苦）。

寂聴 身の上相談って全部、その中に入ると思うよ。

比呂美 ああ、やっぱりそうですね。「仏教のほうでは昔からこう言うんですよ。寂聴先生じゃないですけど」みたいに答えることがよくあります。お名前勝手にお借りしてます（笑）。もともとお経に惹かれて、仏教に近づいていったんですよ。

寂聴 日本のお経きれいでしょ、あなたの詩の力で、これを詩に直してもらいたいわね。

比呂美 はい、数年前には『読み解き「般若心経」』（朝日新聞出版刊）で、『般若心経』、『観音経』、

『地藏和讃』など、やりましたし、今まとめているのが、『阿弥陀経』、『仏遺教経』、『自我偈』

……現代語に訳すのがすっごく楽しいんです。実は、ねらってるんですよ、ポスト寂聴。人生相談も、お経もやりますからね、他にだれか？

寂聴（笑）。

比呂美 あたしはね、

お経はほんとに詩みたいです——比呂美

最初は仏教説話をむさぼり読んでまして、それから、お経というのがほんとに詩みたいだと思って、詩人ですからね、を通して仏教というものに近づいていったんですよ。だけど先生は、仏門に入って修行なされた過程でお経に触れてこられたでしょう。

寂聴 そうそう。それで、お経っていいもんだなあと思った。

比呂美 好きなお経はいろいろあるんですけど、たとえば『観音経』の「妙音観世音みょうおんかんぜおん梵音海潮音 勝彼世間音」という一節。この部分がすごい好きです。

寂聴 私もそこは好き。何かもう、梵音ぼんのん(仏様の声)が聞こえてくるような気がするね。……ウン、観音経が一番、きれいだと思うね。

比呂美 先生てんだいしゅうの天台宗では、メインのお経は『観音経』でしょうか。

寂聴 わりと多いかしら。私が住職を務めていた天台寺(岩手県二戸市)のご本尊も観音様だし。比呂美 『観音経』を元々のサンスクリット語(古代インドの言葉)から漢語に訳した鳩摩羅くまら什じゅうっていう人にすごくあこがれています。写真とかないからよけいに(笑)。先生は『阿弥陀経』はあんまりおやりになりませんか? それも鳩摩羅什が訳したんですよ。

寂聴 『阿弥陀経』は長いからね。でも、友だちが亡くなったりすると、ひとりで『阿弥陀経』

を上げたりする。長いお経でね、よく覚えてないけど、一応ちやちやっと読むのよ。こちらの心が落ち着くの。

比呂美 『阿弥陀経』、確かに長いですけど、その長さも、ああ、めんどくさい男だなあと思いつながら好きなんですよ。

寂聴 男じゃないわよ、お経は(笑)。

比呂美 「懺悔文」、さんげもん「発願文」、ほつがんもん「四弘誓願」、しぐぜいがんとかもみんな好きです。それから四苦八苦という、あの言葉も。

寂聴 「懺悔文」や「発願文」なんかは昔は法話でよく使ったわね。みんなで一緒に唱えると、いいものよ。心が静まって。

比呂美 やっぱり長い間かけて使い込んできたことばがいいんでしょうね。それを訳すなんて無料ぶずいと思いつながら、でも訳します。自分のことばで、意味がわかりたいと思うんです。

比呂美 先生、こうやって向かいあって座ってらして、

病気で鬱の入口に

腰とかおつらくないですか。何年前、先生は腰痛がひどくて入院なさいましたね。

**寂聴** あのときはねえ、背中がもう、なんともかんとも言えないくらい痛い。病院では痛み止めを普通の人の三倍打ってくれたけれど、それでもダメだった。

**比呂美** 二年前に死んだあたしの夫も、背骨だ腰だ膝だって、痛みに取りつかれたみたいで、朝から顔をしかめて不機嫌でした。あっちもこっちも手術して、人工の股関節も入れて、心臓バイパスにペースメーカー、最後は老いたるサイボーグみたいになりましたよ。

**寂聴** 私、せきちゆうかんきょうさくしやう脊柱管狭窄症つぶって言われて、背骨が潰れてるところにセメント入れたらすーっと楽になった。あなたもそれになったらすぐセメント入れなさい。簡単だから。

**比呂美** セメントですか。重たそうですね(編集部注・注射するだけなので重たくありません)。でもそれで楽になってほんとによかった。夫もやればよかったです。そしてそのあと先生は、ようついあつぱくこっせつ腰椎圧迫骨折せつになったんですよ。痛かったですよ、それも。

**寂聴** それが、いろいろ治療してやっと退院して、わが家のお風呂に入って「ああ気持ちいい」って、一息ついたの。でも出たら痛みがひどくなって、脱衣所で動けないのよ。もう虫みたくに床に丸まって、誰かが手を差し伸べてくるだけで痛くて、「痛い痛い」って、ただただ泣いてた。

**比呂美** うわー、つらいですね。痛みを1から最大10として、そのときはいくつくらいですか？  
**寂聴** ええと、そうね、泣いてたときに8くらいかしら。ようやくベッドで横になれて、いくらか楽になった。それが7、かな。気が短くなつて、つまらないことで怒るから、家に来ていたスタッフがみんな、近寄って来なかったよ（笑）。

**比呂美** 死んだ夫は、痛さのあまりに鬱になりました。子どものいるころだったから、家庭の中がもう針のむしろ……。

**寂聴** 私、なりかけたよ、鬱に。横になつてものを考える余裕ができたら、このまま動けなくなるのかな、それじゃもう書けなくなるのかなつて。思うことがだんだん、暗々くなってきて、あ、これがもう鬱の入口だなと思つた。

**比呂美** 先生でもやっぱりそうですか！ それでどうなさいました？

**寂聴** これで鬱になったらみんなが困るだろうと思つたから、小説のこと考えたり、笑える楽しいことを探したりしたのよ。

比呂美 先生は、そういうときも

## シモの世話だけはされたくない

前向きで生きていらっしやるんですね。鬱になりかけたとき、先生、自分の身の上をあれこれお考えになりましたか。一番気になっていらしたことは何でした？

寂聴 やっぱりそのまま動けなくなるからね。私そのとき、這いながらもトイレに行ったの。シモの世話を誰かにしてもらうのが……。

比呂美 ああ、やっぱりそれがおいやですか。こないだ亡くなった石牟礼道子いしむれみちこさんも、どんな状態になったら死を考えますかってお聞きしたとき、「おトイレをひとりで行けなくなったとき」っておっしゃってましたね。

寂聴 でもねえ。人の手を借りてトイレをするとか、失敗するのが恥ずかしい、あそこをむき出しにするのが恥ずかしいなんて、下衆げすな育ちだからなのかもしれないよ。高貴な育ちだと、人の手を借りるのが当たり前で、裸でスパスパ歩くんだって。

比呂美 確かに昔の王朝時代は、下女げじよ下男げなんがおまるおまるを捧げてたって話ですからね。でもね、うちの母は、八十くらいらいいのときに、あれよあれよという間に両手両足がマヒして、寝たきりになっ

て、シモの世話はすべて他人任せになっちゃったんです。最初はさすがに落ちこんでいましたけど、数か月でその状態に慣れてましたね。人間ってすごいなって思いました。「死ぬまで生きる」が先なんですもの。

寂聴（小声で）うん、そうなればね。しかたがないわね。

比呂美 先生はそのあ

**転んでもタダでは起きない寂聴さん**

と、今度は九十歳過ぎてガンの手術して、それから心臓を手術なさったわけですよ。そのときの気分はどんな感じでしたか？

寂聴 大病してもね、かならず治るのよ。もうどうしたの、これって感じ（笑）。

比呂美 ですよ。普通、九十四歳で心臓の手術してベッドにいたら、もう立ち直れないってことになってもおかしくないですよ。どうやって元に戻られましたか。

寂聴 それが不思議なのよ。そうだ、寂庵でお堂を任せている係の人が「それは観音様が守ってくださいさるのです」って言うの。でも私は観音様に守っていただくほどお経も上げていない。

「ちっとも拝んでないの、あなたが一番よく知ってるじゃない」って言ったら「私が毎日お水を替えて、私が拝んでますから」って。ハハハハ。

**比呂美** へえ、まさに代経だいけいですね。でも心臓の手術をなさったときは、さすがの先生も弱っていらっしたそうですね。

**寂聴** 心臓病でカテーテルやったあと、また鬱になりかけたの。それはもう、なりますよ。病院に閉じこもって、自分のからだは自由にならないし、食べものもまずいし。私はいつも法話で「鬱になりかけたら、自分で抜け出さなきゃダメです」って言うてるんだけどね。

**比呂美** あはは、それがなかなかできないんですよ。先生は実際のところ、どうやって抜け出すことができましたんですか？

**寂聴** 自分は今、何をしたら一番幸せな気分になれるかを一所懸命考えたの。私にとって一番うれしいのは、自分の本が出ることでしょ？

**比呂美** はい。それはもうよくわかります。

**寂聴** だと本に編む原稿がないわけよ。何かないか、考えに考えて「あ、俳句だ！」って閃いたの。へタな句を昔からちよっとだけ書き溜めてた。でも、出版社に私が持って行ったら、

どこも断わらないだろうけど、きっと売れないからそれも気の毒だと思ってるね。

比呂美 ……鬱の人が売り方まで考えるんですかー。

寂聴 だから親しい編集者がやってる出版社で自費出版したの（『句集 ひとり』深夜叢書社刊）。そうしたら元気になった。

比呂美 鬱がパカッとなくなっちゃったんですか。

寂聴 一ページに一句でも全然足りないから、俳句に関する随筆を載せたの。そうしたらやっぱり、俳句よりずっとうまいのよね（笑）。自費出版は高くついたけど、これが評判がよくってね。重版になって、売れてるの。

比呂美 素晴らしい句集でしたよ。高橋睦郎さんたかはしむつお（詩人）も、小澤實さんおざわみのる（俳人）も、ほめていらっしやいましたよ。でも、自費出版して重版なんて、今どきありませんよ。

寂聴 しかもね、俳句の賞（星野立子賞ほしのたけこ）までもらったの！

比呂美 まあ。転んでもタダでは起きない寂聴さんですね。

比呂美　ちなみに、心臓病の前にガンで宣告されたときには、

## ガンは怖くない

何をお考えになりました？

寂聴　それがもう不思議でね、人が思うほど、私はガン、怖くないの。父も姉もガンだし、私の周りの人もガンでたくさん死んでるから、若いときは顔にニキビ、歳を取ったらお腹にガン、みたい、いつか自分もなるなあと思ってたの。

比呂美　じゃあストレートに「死」を連想なさったってわけでもないんですね。

寂聴　痛みで入院して、あちこち検査したら胆嚢たんのうに腫瘍が見つかったの。最初、若い医者が「ガンがあります。悪性らしいです」っていきなりしゃべったから私ちよつとムッとしたんだけど、後でちゃんとしたお医者さんが説明してくれたのよ。

比呂美　その場面、ビデオで観ましたよ。先生、淡々と手術を選んでいらっしやいましたよね。寂聴　ガンなんて、死ぬか治るかのどっちかですよ。だから先生に「取ってください」って即座に言ったのよ。お腹を開けると思っていただけ、おへそのまわりに穴を三つ開けて、内視鏡で悪いところを引っ張り出しただけで、痛くもなかった。

比呂美 ご高齢だからって手術しないってことに決めなくて、よかったですね。結果的に。寂聴 私が好きだった宇野千代さんね、九十八歳で亡くなったんですよ。九十四歳まですごく佳い小説を書いていて、そのあとも随筆とかちよいちよい見かけたんですよ。その宇野さんが「私、なんだか死なないような気がする」って言い出したら亡くなったの。だから私が同じこと言い出したら、危ないのよ（笑）。

比呂美 ガンになって、鬱にまでなりかけて、それ

## 地獄や極楽は「ない」

でも「死んだほうが楽だ」とは思われなかったんですね。

寂聴 死ぬことは考えなかったわね。こうなる前は、私、「極楽なんてつまらない。地獄のほうが、次は赤鬼と黒鬼のどっちだ、水責めか火責めか……と忙しくて面白そう」って考えていたのね。

比呂美 あはは、先生らしい。

寂聴 でもあの経験から、地獄に行ったら毎日痛いのかと思うともういやだと思った。

比呂美 もうすでに、この世で責め苦を先取りしていたようなものですものね。

寂聴 まあ、ほんとは地獄とか極楽なんでもものはないと思っ  
ているけどね。

比呂美 え、何ですって？ じゃあ死んだらどうなります？

寂聴 死んだら浄土に行くのよ！

比呂美 あはは、そんないい加減な。浄土があつたらその反対も  
なくちゃ。

寂聴 地獄や極楽はないわよ。だってあなた、差別があつたら  
おかしいじゃないの。

比呂美 ……なるほど。じゃあ、うーんと悪いことをした人  
はどこへ……。あ、でも親鸞さん

も言っていましたね、誰でも浄土に行けるんではないね。

寂聴 悪いことをしたら「すみません」って言って、懺悔ざんげ  
すればいい。仏教の仏さんっていう

のは、そういうところ、いい加減なのよ。

比呂美 そうですかー！ その「すみません」って懺悔するときに  
「南無阿弥陀仏なむあみだぶつ」って言う

んですね。

寂聴 そうそう、「南無妙法蓮華経なむみょうほうれんげきょう」でも  
なんでもいい。あのね、ニュースなんか観てると、

世界で難民救済とか貧困の支援とか、すごくいいことをしに  
行った人がテロだの強盗だので殺

されてしまうでしょう。悪い人が天罰で死ぬんじゃないのよ、  
本当の人生は。

比呂美 小さいころは、悪いことしたらバチが当たるよって教わりましたけどね。だとすると、悪い人っているんでしょうか？

寂聴 人を殺すことも盗むことも、悪いことよ、もちろん。だけでも、それをしなきゃならない人がいる、それが人間の世の中だと思う。それがあから小説も書ける。

比呂美 なるほど。その「しなきゃならない」って事情、その人が何かからさせられているってことだとすると、その何かって前世ということになるんでしょうか。

寂聴 前世というか因果いんがなんてことではないと思うね。ある人が悪いことをするっていうのは、その人自身にそういう要素、弱みみたいなものがあつたんでしょう。

比呂美 因果応報いんがおうほうなんてないと。ああ、先生。すてきすぎます。

寂聴 あなた、旦那さんがまだお元気だったとき、

## 介護は愛情か、エゴか

アメリカに家庭があるのでそれにそれ放っておいて、日本の親御さんのところにしょっちゅう介護しに行ったり来たりしたでしょ。あれは普通できないと思うわね。

**比呂美** 親が老いたら家庭を放り出して面倒をみる、っていうのが日本人のつとめじゃないか、みたいに関心でもどこかで思っていたフシが……。

**寂聴** 今の人はしないね、そんなこと。

**比呂美** ほんとは日本で仕事があったんで、それにかこつけたんです。

**寂聴** それは後から付けた理由だね。やっぱりあなた、普通の人より愛情が深いのよ。

**比呂美** いやー、そう言っていたんだけどうれいんですけど。でも、海外に住んでいる同じ世代の日本の女は、けっこうあたしと同じような感じですよ。ひんぱんに行ったり来たりしてる人もいるし、日本の親をどうするかって、みんなの共通の話題ですもん。でもあたし、父のところにいっても、何もしてなかったんですよ。そばに座ってテレビ観てただけ。まあ、それがあたしにしてほしいことだったんですけど。今になると、もうちょっといてあげたらよかった、つまらない番組を一本だけ三十分付き合うんじゃないかと、三本観ればよかったって……。

**寂聴** つまらないのをいっしょに観てあげただけで、あなたは親孝行ですよ。

**比呂美** いや、たぶんあたし、父のためじゃなくて、自分のために介護していたような気がするんです。

寂聴 それでも、やったことは親孝行には違いないのよ。もうあなたはどんな悪いことしても極楽に行きます(笑)。

比呂美 おー、ほんとですか。ツシヤ、もういつ死んでもいい(笑)。でも先生、極楽なんかなかったんじゃないですか(笑)。

寂聴 あなたの本(『父の生きる』)の表紙にお父さんの写真を出してたけど、いい男だねえ。何をしていた人なの。

比呂美 ……ふふふ、いい男でしょう。あたしも子どものときから大好きで、お父さんと結婚するっていったくらいで。実はその、全身に入れ墨が入ってまして。もう足首から腕の中ほどくらいまで。若いころはヤクザだったんです。戦争から帰ってきて、やけになってヤクザになって。あたしが生まれる前に足を洗ったみたいですけど。

寂聴 そうなの。それじゃ、あなたにその血が濃く出たんじゃないの、アハハハ。

比呂美 さつきも言いましたが、先生ほどじゃないん

いじめとバッティング

ですけど、あっちこっちで人生相談をしています。その中でもけっこう多いのがいじめの相談なんです。子どもの社会も大人の社会も、いじめがよくあります。パワハラ、セクハラ、みんなそうですよね。どうしたらいいんでしょうか。

**寂聴** いじめる側の人たちにコンプレックスがあるんだと思うね、本当は。

**比呂美** なるほど。コンプレックス。その裏返しでいじめるわけですか。社会全体にそれがあるのかしら。たとえば不倫とか、学歴詐称だとかが明らかになると、社会全体がそれとばかりに群がって、その人を叩いて……。

**寂聴** 少し前に私が対談した小保方晴子おぼかたはるこさんのときも、ひどいと思ったね。

**比呂美** 科学とか細胞とか、あたしたちには全然わからないですけどね。彼女が何をやったかやらなかったかはこっちに置いて、万一彼女が何か自分でしていないことを自分の業績にしたとしても、あのメディアのやり方、社会の叩き方っていうのは……。

**寂聴** もう、ひどいものよ。かわいそうだと思ったから、「婦人公論」にそう書いたのよ。

**比呂美** 先生のお書きになったことで、彼女に対する世の中の空気が変わりましたよね。

**寂聴** 私のところにも、なんであんな悪い人をかばうんだとか、抗議みたいなのも来たらしい

のよ。見なかったけどね。

**比呂美** ははは、見ないんですか。先生のお若いときも、先生に対して、世間でああいうバッシングがあつたそうですね。

**寂聴** それよ、私がいじめられたのよ（笑）。『花芯<sup>かしん</sup>』を発表したとき（一九五八年）、週刊誌にベタベタ酷評が出て、「子宮作家」なんてへんな呼び方されて。

**比呂美** そうでしたねえ。あたしも言われたんですよ。子宮詩人って。おいくつときですか。  
**寂聴** まだ三十代で、男がいて、一番きれいだったころよ。週刊誌の中吊り広告を電車で見かけて、ああ誰かこき下ろされてるなあと思つたら私だったの（笑）。ほんと、私の小説なんて読んでもいないような人まで乗つかつて、悪口言つてきたんだから。

**比呂美** まだ三十代で、男がいて、一番きれいだった上に、新進気鋭の女の作家だから叩かれたのかも。「反論なさいましたか？

**寂聴** 新潮社に「反論を書かせてくれ」って頼みに行つただけど、門前払いだったわね。あらゆる文芸誌に五年間、書かせてもらえなかったのよ。

比呂美 文学の世界で、これからって

## 三十代で自殺未遂したわけ

いうときに、先生は文芸誌から締め出されてしまったわけでしょう。やりたいことができなくなったとき、そのときは鬱になったりしませんでしたか。

寂聴 鬱になってる暇なんかなかったわよ。まだ若かったし。

比呂美 忙しく書いていらっしやいましたね。

寂聴 そのころは週刊誌ブームで、雑誌が山ほど出ている時代だったのね。書けなくなった私に、そういう雑誌の編集さんたちが同情してくれて、暮らしには困らなかった。

比呂美 先生、三十代の終わりくらいに、睡眠薬を飲んで自殺未遂してらっしやいますよね。あのときは？

寂聴 ああそれは仕事は関係なくて、ただ男のことでヒステリー起こしたのよ。

比呂美 まあ。男でヒステリーはよくわかるんですけど、それに加えて仕事のほうでも行きづまってしまうこともさっちもいなくなっちゃってというようなことではないんでしょうか。

寂聴 行きづまったことは一度もない（クスクス）。

比呂美

う（息をのむ）……「書けない」と思ったことがない、と。聞かなきゃよかった（笑）。

## あとがき

寂聴先生のところに通い始めて、もうだいぶになります。

一九九〇年に東京で「日独女性作家会議」がありました。日本側は大庭みな子さん、河野多恵子さん、三枝和子さん、津島佑子さん、すごいメンバーだったんですが、そのときにドイツ語の作家たちのために寂庵に瀬戸内寂聴さんを訪ねるといふ企画があり、私は時間が自由にならず、それには参加できませんでした。

そのときの、残念だったなあという思いをずっと抱きつづけていたのです。

十八年後の二〇〇八年、私はついに寂庵を訪ね、先生にはじめてお会いしました。「De 寂聴」という、どこを開いても寂聴先生という雑誌の企画で、編集の新井敏記さんに連れられて寂庵に行き、対談し、先生のタクシーに同乗して宇治へ行き（先生は源氏物語ミュージアムの名誉館長で、私はその年の紫式部文学賞をいただいて、授賞式に来たのです）、みちみち、

「薫大将はワキガではありませんか」

「そうですよ」

「匂宮は、におうのみやつまり人工的にワキガを作り出して自分につけてたわけでしょうか」

「そうですよ」

「匂宮のかいた絵はセックスしてる男女の絵ですよね」

「そうですよ」

『源氏物語』の読者は当時何人くらいいましたか」

「一〇〇人くらいいたかしらね」

などという会話をしました。

そのたびに、私はずっと心の中でもやもやしていたことが、ひとつひとつ先生の手でくつきりと晴らされていったのを感じました。いえ、『源氏物語』にかぎりません。生きるということ、そのものについてです。ブラジャー事件（まえがき）はこのときのことです。

そのとき私は、あまりの先生のオーラにクラクラッとなって、つい、「先生、出家させてください」と本気で頼みこみました。

その瞬間、私は、マジで、髪を切り落とし、男を捨てるつもりで、そう口から出たのでした。

男は捨てることができる、でも子どもとの縁は、私には切れないし、ましてや書くこともやめられない（先生もやめてないけど）と、後になってから考えました。万が一先生がその気になって実際に私の髪をおろしてくださいだったら、いったいどうなってただろうと考えました。

考える前に行動する、これは私の悪い癖でして、それでたくさん苦労をつくりだしてきたのです。

そしたら先生は「あなたはいいのよ」と仰おつしやってにっこりなさいました。

それで私の、きんさんに思いつめた（一瞬で、ですが）気持ちやすっとほぐれ、「そうか、いいの」と納得して引き下がったのでした。

ところが二年後に、また宇治の源氏物語ミュージアムで先生に再会しまして、そのときもまた、先生のオーラにクラクラして、また、後先考えずに瞬間的に思いつめて、「先生、出家させてください」と私はくり返しました。

そのときもまた、先生は穏やかに、にっこりなさって、からかうような声で、「あなたはいいのよ」と仰いました。

今回この企画で先生のところに通い出してから、私はいちども「出家させてください」とは

言い出してないのです。

あの二回で、先生に、こちら側に、この世に、とどめていただいたような気がしました。

今回、とにかく寂聴先生の胸を借りる感じで、人生のぶつかり稽古する心持ちで、まっすぐに先生にむかって人生相談してみようということになり、私の人生上の問題たち、今まで人の人生相談にはこたえてきたけど、自分の問題は放ったらかしてきた、ははは、問題がないわけないんで、山積みになってるんで、それで、先生のところに行って、何もかも洗いざらい、自白剤を飲んだみたいになぶちまけました。

そしたら先生も、自白剤が間接的に作用したみたいに、いろんなことを話してくださって、そういうのはもちろん、人生の諸問題にかかわることなので、下ネタはあるし、漏れでもしたらたくさんの人を傷つけることではあるし、その上、解決できることならとつくに解決してるわけで、解決法なんてないようなデスペレートな問題ばかり。

話すうちに、あまりの濃さに、先生も私も疲れ果て、それで先生が瀬尾まなほさんと呼んで、「ちよっとビール出して」とか「ワイン飲みたいわ」などとということに相成るのでした。

でも、ぶちまけた話をぜんぶ出しちゃったら、あとはもう日本に住んでいられない、亡命す

るしかないので、私が普段から全幅の信頼を置いているライターたなかありの田中なかありさんに頼んで、これからもいちおう日本で暮らしていけるくらいにまとめてもらって、こういう形になったのでありました。

田中有さん、みごとなまとめをありがとうございました。

瀬尾まなほさん、いつもありがとうございます。その上、すてきな解説まで書いていただきました。まして、ありがとうございます。

集英社インターナショナルの佐藤眞さん、企画から編集から何から何まで、ありがとうございます。いました。

そして寂聴先生、この日々、ほんとに楽しゅうございました。まだまだお会いします。お会いして、お騒がせして、お世話になります。どうぞよろしくお願いいたします。

二〇一八年九月

伊藤比呂美

## 解説——みずみずしい二人

瀬戸内寂聴秘書 瀬尾まなほ

「みずみずしさ」という言葉は十代、二十代の、青春まっさかりのはじけんばかりの生命力を全力で表現している、そんな若い人たちのことを言うと思っていた。私自身、瀬戸内寂聴の秘書として寂庵に来るまでは六十歳以降はおばあさんと思っていたし、自分が大学生のときまで両親の世代が恋愛をしたり、またもつとその上の世代（私にとってはおばあさん）が現役で恋愛をしたりセックスをするなんて逆立ちしても思えなかった。そして恋愛は若い私たちのものと勝手に思っていた。

私が先生と呼ぶ、瀬戸内寂聴のところへ働くようになってから私の世界は大きく変わった。六十歳なんて若くてまだまだ元気で八十歳を超えても現役で、いきいきしたおばあさんが多いからだ。

編集者でも長く連れ添った奥さんと別れて自分の子供より若い女性と結婚し、七十代で二歳

の子どもがいる人。六十歳のバリバリのキャリアウーマンは自分の子供と同じくらいの年齢の彼氏を寂庵に連れて来て先生に自慢していた。何も知らない人が「息子さん？」と聞いたので私は思わず苦笑いした。私が持っていた世界観がいい意味で大きく壊れ、恋愛というものは、いくつでもしてもいいと思えるようになったのも、自分のことを隠さず、オープンに書き、話す先生のもとにいるからだろう。

「コンチッワー」と腰より短い、焼きそば？ ソバージュ？ の黒い髪の毛を揺らしながら、黒のサングラスをかけタクシーから降りてきたのが初めての伊藤比呂美さんとの出逢いだった。寂庵で先生とこの本の対談をするからとアメリカから来てくださった。そのとき伊藤さんはご主人の介護をしていて、アメリカと日本の生活とで大忙しだった。

対談の際に私は同席しなかったが、お茶を出したと思えばすぐさま先生に呼び戻され、ビールを持ってくるように言われた。これが対談ではほぼ毎回のことだった。私が対談している場の洋間に行くと伊藤さんがまるで水槽を覗くかのように前のめりで先生の話を聞いていた。それがとても印象的だった。二人でどんなことを話しているのだろうと私は気になっていた。

この解説の依頼を頂いたとき、「私でいいのか!？」という不安しかなかった。しかも伊藤さ

んも了承してくださっているとのこと。さっそくゲラを読むと、思わず「わあ」と言う声しか出なかった。

先生自身の病気の話、伊藤さんの介護、看病の話、書くこと、また自分の性の話、生きるということ、死ぬということ、あからさまに語り合っている。伊藤さんのお父様の介護のときに特別何かをしていたわけではなく、一緒にテレビを観ていたことを「今になると、もうちょっといてあげたらよかった、つまらない番組を一本だけ三十分付き合うんじゃないやなくて、三本観ればよかったって……。」というところに伊藤さんの優しさを感じる。また自分の亡き夫のこと、そして離婚したことによって急にアメリカに連れてきた娘のこと。またストレートに先生に子供を捨てて家を出る心境を聞いている。先生は先生で娘に負い目があるけれど「家族」をテーマにした小説を書きたいと言う。

話が恋愛になるとどんどんオープンになり伊藤さんは何もかも話してしまう。セックスの話になると「したくても、入らなくなるんです」と伊藤さん。そこにすかさず「私のところに七十歳、八十歳の女の人から身の上相談で、若い人としていて、このごろ男が冷たくなったなんて悩み、いっぱい来るわよ」と先生。もうぎょっと目玉が飛び出すような話ばかりで私には未経験すぎ

てどぎまぎしてしまう。

伊藤さんの感情がそのまま言葉に出ていて、きっとそこまで自分をさらけ出せる人は数少ないだろうし、その開放的なところが伊藤さんの魅力だと思った。それは先生も同じで、自分を良く見せようとかそんなこと一ミリも思わなくて、「自分」というものをそのまま世の中に差し出してやるようなその潔い感じ。

私が読んでいて思うのは、何も纏まとっていない二人の空気感が心地よくもあり、またドキドキさせる。

今までの私は「セックス」と口にするだけでなんだかとても恥ずかしいようなそんな感覚だった。けれど、生命上にそれは絶対必要で、当たり前前のことで、私だってその行為によって生まれてきた。当たり前前のことを当たり前前に話している、それだけのことなのに、きっと今の時代でもここまでオープンに話す人は多くない。きっとこれを読んで「そうそう」とうなずく人はたくさんいると思う。

先生は出家するまで数多くの恋愛を繰り返し、不倫も経験している。伊藤さんは男が途切れたことがないと言う。けれど、そんな二人がきっぱり「男よりも子供よりも仕事」と言い切っ

てしまう。物書きは仕事優先で、書くことが何よりも大事だと。仕事もして恋愛もして、それゆえに子供を犠牲にした二人の女性は、それでも書くことに人生のすべてを懸けている。私はそんな二人をただ遥か低いところからぼーっと見上げていて、きっと私もいつかそこに近づいたりするのだろうか、いや、私はそんな勇氣ないよ、と思いながらもじもじしてる。

精いっぱい生きて、自分を誤魔化さずにいるということは、この世では生きづらいことなのかもしれない。でもそんなことを感じさせず、気にもとめてない二人の作家を目の前にして私が思うことは、「みずみずしさ」という言葉は若い人にだけ使う言葉ではなく、はじけんばかりの生命力に溢れ、愛に向かって正直に生きている九十代と六十代の二人にこそ「みずみずしさ」を感じてしまう。先生がいつも言う「生きることとは愛すること」それを全身で表現しているのは、この二人だと思う。

先生、ちょっと人生相談いいですか？  
瀬戸内寂聴＋伊藤比呂美・著

発行：集英社インターナショナル（発売 集英社）  
定 価：1,300 円（本体）＋税  
発売日：2018 年 10 月 26 日  
ISBN：978-4-7976-7363-0 C0095

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)